

1

過去から未来へと、時をつなぐスポーツの力



佐伯 年詩雄
SAEKI Toshio

日本ウェルネススポーツ大学スポーツプロモーション学部教授
筑波大学名誉教授

オリンピックをはじめとして、古代からスポーツは人々や神々、世界を結びつけてきた。そして誠実で真摯な競技が生み出す感動は今もなお世界中の人々を魅了し続けている。我々日本人にもたらされたスポーツの「つなぐ力」を考える。

「人類の祭典」がすぐそこに

新国立競技場のデザインに始まり、ロゴマークの選定や会場移転等でゴタゴタしながらも、2020東京オリンピック・パラリンピック競技大会まであと3年を切った。オリンピック組織委員会は1万数千の競技者・役員、その数倍のメディア関係者、そして数十万の外国人観戦者の来日を予測する。

1896年、ギリシャのアテネにおいて、わずか14ヶ国241名の男子競技者の参加によってスタートした近代オリンピックは、回を重ねるたびに大きくなり、今や巨大なグローバルイベントとなった。競技者の増加に加えて、先の東京五輪（1964年）から始まった衛星放送によるテレビ中継は、今や「宇宙飛行士から南極越冬隊員ま

でをオリンピックに結び付ける」とまで言われ、少なくとも延べ20億人超がこの世紀の祭典を観戦するとされる。こうした点からみれば、近代オリンピックは、まさに「人類の祭典」の呼び名にふさわしい、世界の人々を共通の関心事でつなぎ、結び付ける力を持っているのである。

この世界を一つに結び付け、人々を人類として一つにつなぐ世紀の祭典が、もうすぐそこにやって来ている。そして私たちには、ホスト国民の一人として、改めてそのミッションを自覚し、その成功に貢献することが求められている。ここでは、この世界を結びつけるスポーツの力を、過去から未来へと時をつなぐスポーツの力に視点を当てて考えてみよう。

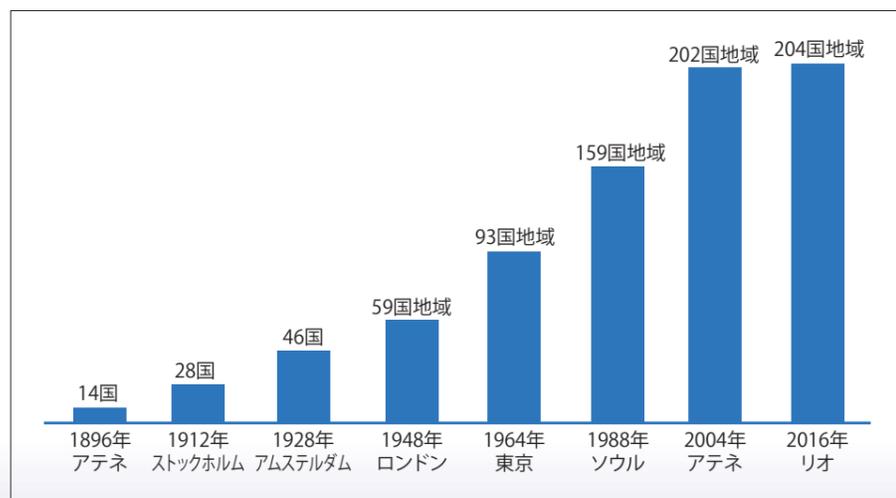


図1 近代オリンピック大会参加国の増大

古代の祈りを未来の夢に

ヨーロッパのスポーツ愛好者が近隣の仲間呼びかけて始めた近代オリンピック競技会が、かくも盛大な「人類の祭典」に成長したのは、それなりの理由がある。その生みの親ピエール・ド・クーベルタン男爵は、古代ギリシャのオリンピックをモデルとし、その理念を継承・近代化することによって近代オリンピックの新たなブランドを作り上げようとした。

古代オリンピックは、オリンポスの山々に住まうギリシャの神々を慰め、その恩寵にあずかるために神々に捧げられる祭典競技会であった。うるう年に行われるこの競技会には、ギリシャ全土からの競技者が参加したが、彼らの安全を保障するために大会前後の数カ月間を「エケケイリア」と呼ぶ聖なる休戦の期間に定めていた。古代ギリシャでは、ポリス（都市国家）間の戦争が絶えなかったが、このエケケイリアは尊重され、オリンピックによる聖なる休戦は、戦乱の中での東の間の平和をもたらしたといわれる。

クーベルタン男爵は、うるう年の開催とともにこの伝承を引き継ぎ、それを「平和の希求」として近代化し、近代オリンピックの存在理由の第一義とした。ここから「平和の祭典」としてのオリンピック・ブランドが構築された。つまり人類を一つにつなげる近代オリンピックの力は、エケケイリアに示された古代の知恵が、千年の時を超えて蘇り、未来の夢につながることによって生まれているのである。オリンピック競技会が、ワールドカップ等の国際競技を凌駕して、スポーツ界における至高の地位を確立するのは、鍛え抜かれた競技者の熾烈な戦いを「平和と友好・親善」に捧げるといふ崇高なその理念によるのであり、そしてそれは古代ギリシャから継承したスポーツの力に他ならない。女神ヘーラーの神殿跡で11人の巫女によって採火された火をリレーし、大会のメイン会場に灯し掲げる一連の聖火儀礼も、オリンピック旗の大会開催地への継承も、古代を今に甦らせて未来につなぐ、時を超える営みなのである。



写真1 古代遺跡ヘーラー神殿におけるロンドン五輪聖火の採火式



写真2 リオ五輪閉会式におけるバハ IOC 会長から小池都知事に五輪旗の引き渡し

天と地、神々と人々をつなぐスポーツ

こうした時を超えるスポーツの力の源泉は、誠実で真摯な競技が生み出す感動が、人々のみならず、神々をも魅了することにあると思われる。だから古くから、スポーツ競技は神々を慰撫し、そのメッセージを何う営みとされてきたのである。古代ギリシャにおいては、フィリギア人のペロプスは、戦車競走でピサ王オエノマウスを打ち破り、その王女と王国を獲たとされる。ホメロスの叙事詩「イリアースとオデッセイ」には、神々が自らの愛好する競技者を勝たせるために、例えば天使を使わせて投槍を遠くまで運ばせるなど、競技に干渉する様子が描かれている。

また古墳時代の後期、出雲の国の野見宿禰が当麻蹶速との相撲に勝利し、彼の所有地大和の国を手



写真3 戸外で裸足の第一回国民体育大会中学女子バレーボールの決勝戦



写真4 赤ちゃんを背負って入場行進、第六回国民体育大会開会式

に入れたとされている。奈良時代になると、相撲は重要な宮廷行事となり、全国から選ばれた力士が東西に分かれて対戦し、その勝利によって山の幸か海の幸の豊饒を占い、祈願する営みとなっていた。

これらの事例には、スポーツ競技が強き者・優れた者を選び出す営みである事もさることながら、それ以上に、その結果によって神の御心を拝察し、その意図を察知しようとする神聖な営みでもあることが示されている。だから「勝利の女神の微笑」という謂れには、「人事を尽くして天命を待つ」と同様に、競技の結果は神々のお導きであり、勝者とは神に選ばれた者であることが意味されているのである。また例えば、村祭における奉納相撲には、子供たちの健やかな育ち、稔りの豊かさの願い、生活の安寧と平和の希求が込められていた。こうしてみると、古今東西を通じてスポーツは、共同体の願いと祈りを天に届ける営みであり、神意を伺い公示する仕業なのである。神社の境内から土俵が消えて久しいが、こうした天と地をつなぎ、神々と人々を結ぶスポーツの力は衰えることなく、時を超えて継承されているのである。

英雄と共同体の絆

振り返ってみれば、敗戦の痛手と混乱を超えて、この

国をまとめ上げた力はスポーツに負うところが大きい。泳ぐたびに世界新記録を打ち立てた水泳競技の古橋広之進、プロボクシング・フライ級で世界チャンピオンとなった白井義男、空手チョップをふるって悪役を懲らして日本中を沸かしたプロレスリングの力道山、「鬼に金棒・小野に鉄棒」と呼ばれた体操競技の小野喬等は、誰しもが知る復興日本の英雄達であった。

そしてこれらの栄誉ある列に、1946年、敗戦の翌年に日本体育協会を中心として、全国のスポーツ愛好者が自主的に始めた「国民体育大会」が加えられるべきであろう。「国体」と愛称されるこのスポーツ大会は、都道府県の代表選手を一堂に集め、郷土の名誉を競う総合競技会の形で行われた。国体は、敗戦の傷が大きく残るぎりぎりの暮らしの中で、人々と地域をつなぎ、そしてそれを日本という国に結び付けていく共同体復興の仕掛けとなった。「若い力と感激に」と歌われる国体讃歌は、第二回金沢大会からのものであるが、まさに貧しさの中から立ち上がり、夢と希望の志に向けて人々を結びつけ、つなぎ合ったのである。

こうした企まざる一連のスポーツの力は、1964年の東京オリンピックにおいて開花する。東洋の魔女と呼ばれた女子バレーボールの栄光、体操日本の躍進、レスリングのメダルラッシュ等である。そしてこのスポーツのつなぐ力は、札幌から長野へと引き継がれ、スキージャンプにおける日の丸飛行隊の快挙をもたらす。もちろんこうした栄光の陰には、発達するスポーツ科学の成果と競技者のたゆまぬ努力があるが、同時に神の恩寵も秘められている。筆者が行った長野冬季五輪金メダリストのインタビュー調査では、勝因の第一として、「才能」「練習・努力」「適切な指導と環境」よりも、「幸運」を上げるものが大半であった。陸上競技界最速の絶対王者ウサ

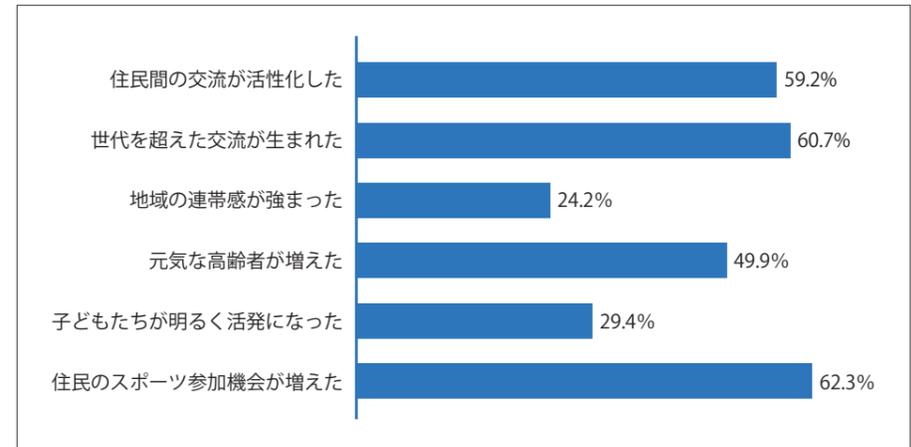


図2 総合型地域スポーツクラブの効用に関する肯定的回答率

イン・ボルトがするように、レースに臨むアスリートの多くが「十字を切る」のは、神の加護を念じる行為に他ならない。

つながりの力の再生と発展

その後、テレビの驚異的な普及と相まってスポーツの人気はますます高まり、ビジネスとして成長するとともに、ヒロイズムは希薄となり、スポーツの祈りの力は衰弱した。アスリートはテレビコマーシャルの常連となり、芸能タレントやアイドルに変貌する。こうして、プロ化したアスリートは共同体の命運に献身する殉教者であるよりは賞金稼ぎの億万長者となり、スポーツのつなぐ力の神秘性は著しく衰退したのである。

こうした流れの背景にあった高度経済成長がバブル景気の破綻とともに終了し、長いデフレの時代に入る。少子高齢化という難敵を抱え、景気浮揚に苦勞する時代ではあったが、スポーツ人気は相変わらずであった。しかし、プロ野球のトップクラスのアスリートが米国のメジャーリーグで活躍し、Jリーガーのエリート達も英国やヨーロッパの一流クラブに移籍した。こうして、アスリートと共同体の絆は弱まり、スポーツの時を超えて人々をつなぐ力は影をひそめた。

2011年3月11日、未曾有の大災害「東日本大震災」が発生した。地震の破壊に加えて巨大津波が襲い、さらに福島原発の汚染が追い打ちをかけ、死傷者十数万という甚大な被害をもたらした。ある意味で共同体存亡の危機が起きたのである。被災地の人々をはじめ、日本人の冷静沈着な行動は高い評価を受けたが、天災による大不幸は深い悲しみと影を日本社会に落とした。

ここでスポーツのつなぐ力が再生する。「こんな時に

スポーツしてて、いいのか?」という存在論的問いに、「スポーツで答えよう」とアスリートが勇気を奮って立ち上がった。「がんばろう日本、生かされる命に感謝し、全身全霊で正々堂々とプレーすることを誓います」と、懸命なプレーで絆を示し、被災地と日本を元気づけるという選抜高校野球の選手宣誓、「見せましょう、野球の底力を」という復興支援プロ野球試合での選手挨拶などである。それを皮切りに、「スポーツで元気を、スポーツでつながりを」が大きなムーブメントとなっていった。そしてあの「なでしこジャパン」のサッカー女子ワールドカップ優勝の奇跡が起こった。

ここからスポーツの「つなぐ力」が蘇り、さらにつながりの世界を拓いてゆく。今やスポーツは、伝統の教育はもちろん、健康・体力作りの役割に加えて、人々をつなぐ力が高く評価され、ソーシャルキャピタル（社会資本）の重要な柱となり、地域創生におけるキーワードの一つに挙げられている。スポーツの交わりとつながりから、暮らしの内側で創られる新しい公共性が期待される。国造りが一段落し、暮らしづくりの時代に入った。単一種目、同世代、勝利志向の学校運動部モデルに代わって、多種目、多世代、多目的な総合型地域スポーツクラブづくりが進められている。2020年大会でも「レガシー」が問われているが、インフラ以上に、豊かな交流を楽しむスポーツライフスタイルの創造と推進が期待されるのである。

<図・写真提供>

図1、写真1 JOCホームページ
 図2 文部科学省平成23年総合型地域スポーツクラブに関する実態調査
 写真2 AFP通信、2016年8月22日配信
 写真3、4 日本体育協会75年史